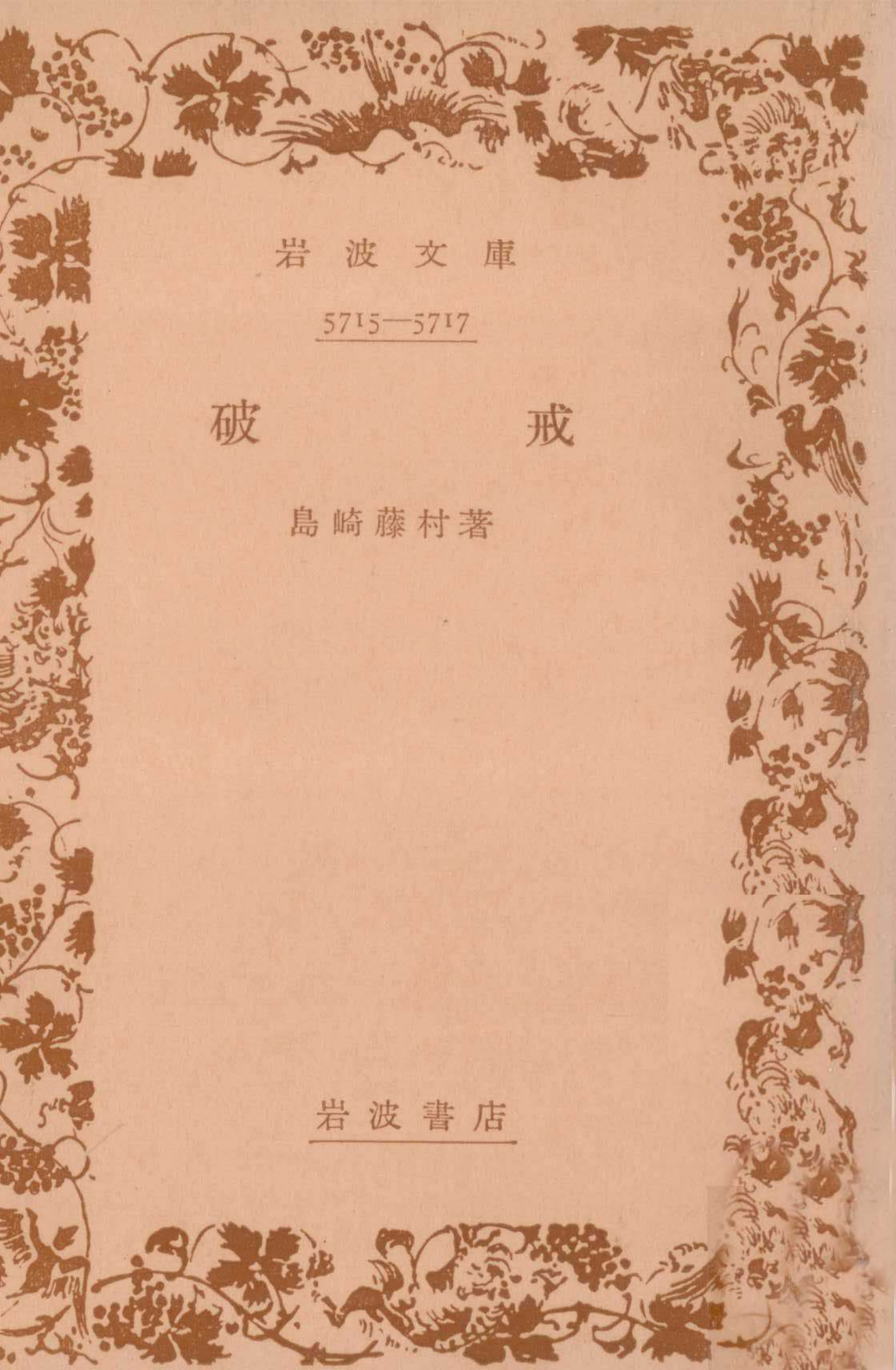




岩波文庫

5715—5717

破 戒

島崎藤村著

岩波書店

昭和三十三年一月七日 第一刷發行
昭和三十三年十一月五日 第四刷發行

©

破

戒

定價百二十圓

著者

島 しま

崎 さき

藤 とう

村 そん

發行者

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

岩

波

雄

二

郎

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五番地

山

田

一

雄



發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二丁目

株式會社

岩

波

書

店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

岩 波 文 庫

5715—5717

破

戒

島 崎 藤 村 著



岩 波 書 店

破

戒

第一章

一

蓮華寺では下宿を兼ねた。瀬川丑松が急に轉宿を思ひ立つて、借りることにした部屋といふのは、其藏裏つゞきにある二階の角のところ。寺は信州下水内郡飯山町二十何ヶ寺の一つ、眞宗に附屬する古刹で、丁度其二階の窓に倚凭つて眺めると、銀杏の大木を経て飯山の町の一部分も見える。さすが信州第一の佛教の地、古代を眼前に見るやうな小都會、奇異な北國風の屋造、板葺の屋根、または冬期の雪除として使用する特別の軒庇から、ところ／＼に高く顯れた寺院と樹木の梢まで——すべて舊めかしい町の光景が香の烟の中に包まれて見える。たゞ一際目立つて此窓から望まれるものと言へば、現に丑松が奉職して居る其小學校の白く塗つた建築物であつた。丑松が轉宿を思ひ立つたのは、實は甚だ不快に感ずることが今の下宿に起つたからで。尤も賄でも安くなければ、誰も斯様な部屋に満足するものは無からう。壁は壁紙で張りつめて、それが煤けて茶色になつて居た。粗造な床の間、紙表具の軸、外には古びた火鉢が置いてあるばかりで、何となく世離れた、靜寂な僧坊であつた。それがまた小學教師といふ丑松の今の境遇に映つて、妙に佻しい感想を起させもする。

5
今の下宿には斯ういふ事が起つた。半月程前、一人の男を供に連れて、下高井の地方から出て

來た大日向といふ大盡、飯山病院へ入院の爲とあつて、暫時腰掛に泊つて居たことがある。入院は間もなくであつた。もとより内證はよし、病室は第一等、看護婦の肩に懸つて長い廊下を往つたり來たりするうちには、自然と豪華が人の目にもついて、誰が嫉妬で噂するともなく、「彼は穢多だ」といふことになつた。忽ち多くの病室へ傳つて、患者は總立。「放逐してしまへ、今直ぐ、それが出来ないとあらば吾儕擧つて御免を蒙る」と腕捲りして院長を脅すといふ騒動。いかに金盡でも、この人種の偏執には勝たれない。ある日の暮、籠に乗せられて、夕闇の空に紛れて病院を出た。籠は其儘もとの下宿へ舁ぎ込まれて、院長は毎日のやうに來て診察する。さあ今度は下宿のものが承知しない。丁度丑松が一日の勤務を終つて、疲れて宿へ歸つた時は、一同「主婦を出せ」と喚き立てるところ。「不淨だ、不淨だ」の罵詈は無遠慮な客の口唇を衝いて出た。「不淨だとは何だ」と丑松は心に憤つて、蔭ながらあの大日向の不幸を憐んだり、道理のないこの非人扱ひを慨いたりして、穢多の種族の悲惨な運命を思ひつゞけた——丑松もまた穢多なのである。

見たところ丑松は純粹な北部の信州人——佐久小縣あたりの岩石の間に成長した壯年の一人とは誰の目にも受取れる。正教員といふ格につけられて、學力優等の卒業生として、長野の師範校を出たのは丁度二十二の年齢の春。社會へ突出される、直に丑松はこの飯山へ來た。それから足掛三年日の今日、丑松はたゞ熱心な青年教師として、飯山の町の人に知られて居るのみで、實際穢多である、新平民であるといふことは、誰一人として知るものが無かつたのである。

「では、いつ引越していらつしやいますか。」

と聲をかけて、入つて來たのは蓮華寺の住職の匹偶。年の頃五十前後。茶色小紋の羽織を着て、

瘠せた白い手に珠數を持ち乍ら、丑松の前に立つた。土地の習慣から「奥様」と尊敬められて居る斯の有髪の尼は、昔者として多少教育もあり、都會の生活も萬更知らないでも無いらしい口の利き振であつた。世話好きな性質を額にあらはして、微な聲で口癖のやうに念佛して、相手の返事を待つて居る様子。

其時、丑松も考へた。明日にも、今夜にも、と言ひたい場合ではあるが、さて差當つて引越しするだけの金が無かつた。實際持合せは四十錢しかなかった。四十錢で引越しの出来よう筈もない。今の下宿の拂ひもしなければならぬ。月給は明後日でなければ渡らないとすると、否でも應でも其迄待つより外はなかつた。

「斯うしませう、明後日の午後といふことにしませう。」

「明後日？」と奥様は不思議さうに相手の顔を眺めた。

「明後日引越すのは其様に可笑いでせうか。」丑松の眼は急に輝いたのである。

「あれ——でも明後日は二十八日ぢやありませんか。別に可笑いといふことは御座ませんがね、私はまた月が變つてから來つしやるかと思ひましてサ。」

「む、これはおほきに左様でしたなあ。實は私も急に引越しを思ひ立つたものですから。」

と何氣なく言消して、丑松は故意と話頭を變へて了つた。下宿の出来事は烈しく胸の中を騒がせる。それを聞かれたり、話したりすることは、何となく心に恐しい。何か穢多に關したことになる、毎時もそれを避けるやうにするのが是男の癖である。

「なむあみだぶ。」

と口の中で唱へて、奥様は別に深く掘つて聞かうとしなかつた。

二

蓮華寺を出たのは五時であつた。學校の日課を終ると、直ぐ其足で出掛けたので、丑松はまだ勤務の儘の服裝で居る。白墨と塵埃とで汚れた着古しの洋服、書物やら手帳やらの風呂敷包を小脇に抱へて、それに下駄穿、腰辨當。多くの勞働者が人中で感ずるやうな羞恥——そんな思を胸に浮べ乍ら、鷹匠町の下宿の方へ歸つて行つた。町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が濡れた道路に群つて居た。中には立ちとゞまつて丑松の通るところを眺めるもあり、何かひそ／＼立話をして居るものもある。「彼處へ行くのは、ありやあ何だ——む、教員か」と言つたやうな顔付をして、酷しい輕蔑の色を顯して居るものもあつた。是が自分等の預つて居る生徒の父兄であるかと考へると、淺猿しくもあり、腹立たしくもあり、遽に不愉快になつてすた／＼歩き初めた。

本町の雜誌屋は近頃出來た店。其前には新着の書物を筆太に書いて、人目を引くやうに張出してあつた。かねて新聞の廣告で見て、出版の日を樂みにして居た『懺悔錄』——肩に猪子蓮太郎氏著、定價までも書添へた廣告が目につく。立ちどまつて、其人の名を思出してさへ、丑松はもう胸の踊るやうな心地がしたのである。見れば二三の青年が店頭に立つて、何か新しい雜誌でも獵つて居るらしい。丑松は色の褪せたズボンの袖囊の内へ手を突込んで、人知れず銀貨を鳴らしながら、幾度か其雜誌屋の前を往つたり來たりした。兎に角、四十錢あれば本が手に入る。

しかし其を今茲で買つて了へば、明日は一文無しで暮さなければならぬ。轉宿の用意もしなければならぬ。斯ういふ思想に制せられて、一旦は往きかけて見たやうなものの、やがて復た引返した。ぬつと暖簾を潜つて入つて、手に取つて見ると——それはすこし臭氣のするやうな、粗惡な洋紙に印刷した、黄色い表紙に『懺悔録』としてある本。貧しい人の手にも觸れさせたいといふ趣意から、わざと質素な體裁を擇んだのは、是書の性質をよく表して居る。あゝ、多くの青年が讀んで知るといふ今の世の中に、飽くことを知らない丑松のやうな年頃で、どうして讀まず知らずに居ることが出來よう。智識は一種の饑渴である。到頭四十錢を取出して、欲いと思ふ其本を買求めた。なけなしの金とはいひ乍ら、精神の慾には替へられなかつたのである。

『懺悔録』を抱いて——買つて反つて丑松は氣の衰頽を感じ乍ら、下宿をさして歸つて行くと、不圖、途中で學校の仲間に出逢つた。一人は土屋銀之助と言つて、師範校時代からの同窓の友。一人は未だ極く年若な、此頃準教員に成つたばかりの男。散歩とは二人のぶら／＼やつて來る様子でも知れた。

「瀬川君、大層遅いぢやないか。」

と銀之助は洋杖を鳴し乍ら近いた。

正直で、しかも友達思ひの銀之助は、直に丑松の顔色を見て取つた。深く澄んだ目付は以前の快活な色を失つて、言ふに言はれぬ不安の光を帯びて居たのである。「あゝ、必定身體の具合でも悪いのだらう」と銀之助は心に考へて、丑松から下宿を探しに行つた話を聞いた。

「下宿を？ 君はよく下宿を取替へる人だねえ——此頃あそこの家へ引越したばかりぢやない

か。」

と毒の無い調子で、さも心から出たやうに笑つた。其時丑松の持つて居る本が目についたので、銀之助は洋杖を小脇に挟んで、見せろといふ言葉と一緒に右の手を差出した。

「是かね。」と丑松は微笑みながら出して見せる。

「む、『懺悔録』か。」と準教員も銀之助の傍に倚添ひながら眺めた。

「相變らず君は猪子先生のものが好きだ。」斯う銀之助は言つて、黄色い本の表紙を眺めたり、一寸内部を開けて見たりして、「さう／＼新聞の廣告にもあつたツけ——へえ、斯様な本かい——斯様な質素な本かい。まあ君のは愛讀を通り越して崇拜の方だ。は／＼／＼、よく君の話には猪子先生が出るからねえ。噓かしまた聞かせられることだらうなあ。」

「馬鹿言ひたまへ。」

と丑松も笑つて其本を受取つた。

夕靄の群は低く集つて来て、あそこでも、こゝでも、最早ちら／＼灯が點く。丑松は明後日あたり蓮華寺へ引越すといふ話をして、この友達と別れたが、やがて少許行つて振返つて見ると、銀之助は往來の片隅に佇立んだ儘、熟と是方を見送つて居た。半町ばかり行つて復た振返つて見ると、未だ友達は同じところに佇立んで居るらしい。夕餐の煙は町の空を籠めて、悄然とした友達の姿も黄昏れて見えたのである。

鷹匠町の下宿近く來た頃には、鉦かねの聲が遠近とんちんの空に響き渡つた。寺々の宵の勤行おつとめは始つたのであらう。丁度下宿の前まで來ると、あたりを警める人足の聲も聞えて、提灯の光あかりに宵闇の道を照し乍ら、一挺ちやうの籠かごが昇かがれて出るところであつた。あゝ、大盡が忍んで出るのであらう、と丑松は憐んで、默然もくねんとして其處に突立つたつて見て居るうちに、いよく其とは附添つぎの男で知れた。同じ宿に居たとは言ひ乍ら、つひぞ丑松は大日向おほひなたを見かけたことが無い。唯附添つぎの男ばかりは、よく藥の罎びんなどを提さげて、出たり入つたりするところを見かけたのである。その雲を突くやうな大男が、今、尻端折しりはしをりで、主人を保護したり、人足を指圖さしずしたりする甲斐々々しさ。穢多たの中でも卑賤いやしい身分のものと見え、其處に立つて居る丑松を同じ種族やからとは夢にも知らないで、妙に人を憚はばるやうな様子して、一寸會釋あしやくし乍ら側を通りぬけた。門口に主婦かみさん、「御機嫌よう」の聲も聞える。見れば下宿の内なかは何となく騒々しい。人々は激昂したり、憤慨したりして、いづれも聞えよがしに罵ののつて居る。

「難有ありがたうぞんじます——そんなら御氣をつけなすつて。」

とまた主婦かみさんは籠かごの側へ駈寄かけつて言つた。籠かごの内なかの人は何とも答へなかつた。丑松は黙つて立つた。見る／＼昇かがれて出たのである。

「ざまあ見やがれ。」

これが下宿の人々の最後に揚げた凱歌であつた。

丑松がすこし蒼あせざめた顔をして、下宿の軒を潜くぐつて入つた時は、未だ人々が長い廊下に群つて居た。いづれも感情を制おさへきれないといふ風で、肩を怒らして歩くもあり、板の間を踏み鳴らす

もあり、中には鹽を擲んで庭に撒散らす彌次馬もある。主婦は燧石を取出して、清淨の火と言つて、かち／＼音をさせて騒いだ。

哀憐、恐怖、千々の思は烈しく丑松の胸中を往來した。病院から追はれ、下宿から追はれ、其殘酷な待遇と恥辱とをうけて、黙つて昇がれて行く彼の大盡の運命を考へると、嚙籠の中の人には悲慨の血涙に噎んだであらう。大日向の運命は臆てすべての穢多の運命である。思へば他事では無い。長野の師範校時代から、この飯山に奉職の身となつたまで、よくまあ自分は平氣の平左で、普通の人と同じやうな量見で、危いとも恐しいとも思はずに通り越して來たものだ。斯うなると胸に浮ぶは父のことである。父といふのは今、牧夫をして、烏帽子ヶ嶽の麓に牛を飼つて、隱者のやうな寂しい生涯を送つて居る。丑松はその西乃入牧場を思出した。その牧場の番小屋を思出した。

「阿爺さん、阿爺さん。」

と口の中で呼んで、自分の部屋をあちこちあちこちと歩いて見た。不圖父の言葉を思出した。はじめて丑松が親の膝下を離れる時、父は一人息子の前途を深く案じるといふ風で、さまざまの物語をして聞かせたのであつた。其時だ——一族の祖先のことも言ひ聞かせたのは。東海道の沿岸に住む多くの穢多の種族のやうに、朝鮮人、支那人、露西亞人、または名も知らない島々から漂着したり歸化したりした異邦人の末とは違ひ、その血統は古の武士の落人から傳つたもの、貧苦こそすれ、罪惡の爲に穢れたやうな家族ではないと言ひ聞かせた。父はまた添付して、世に出て身を立てる穢多の子の秘訣——唯一つの希望、唯一つの方法、それは身の素性を隠すより外

に無い、「たとへいかなる目を見ようと、いかなる人に邂逅はうと決して其とは自白けるな、一旦の憤怒悲哀の是戒を忘れたら、其時こそ社會から捨てられたものと思へ。」斯う父は教へたのである。

一生の秘訣とは斯の通り簡單なものであつた。「隠せ。」——戒はこの一語で盡きた。しかし其頃はまだ無我夢中、「阿爺が何を言ふか」位に聞流して、唯もう勉強が出来るといふ嬉しさに家を飛出したのであつた。楽しい空想の時代は父の戒も忘れ勝ちに過ぎた。急に丑松は少年から大人に近いたのである。急に自分のことが解つて來たのである。まあ、面白い隣の家から面白くない自分の家へ移つたやうに感ずるのである。今は自分から隠さうと思ふやうになつた。

四

あをのけさまに疊の上へ倒れて、暫時丑松は身動きもせず考へて居たが、臆て疲勞が出て眠て了つた。不圖目が覺めて、部屋の内を見廻した時は、點けて置かなかつた筈の洋燈が寂しさうに照して、夕飯の膳も片隅に置いてある。自分は未だ洋服の儘。丑松の心地には一時間餘も眠つたらしい。戸の外には時雨の降りそぐ音もする。起き直つて、買つて來た本の黄色い表紙を眺め乍ら、膳を手前へ引寄せて食つた。飯櫃の蓋を取つて、あつめ飯の臭氣を嗅いで見ると、丑松は最早嘆息して了つて、そこ／＼にして膳を押遣つたのである。「懺悔録」を披げて置いて、先づ残りの巻煙草に火を點けた。

この本の著者——猪子蓮太郎の思想は、今の世の下層社會の「新しい苦痛」を表白すと言はれ

て居る。人によると、彼男ほど自分を吹聴するものは無いと言つて、妙に毛嫌するやうな手合もある。成程、其筆にはいつも一種の神經質があつた。到底蓮太郎は自分を離れて說話をする事の出来ない人であつた。しかし思想が剛健で、しかも觀察の精緻を兼ねて、人を吸引ける力の壯んに溢れて居るといふことは、一度其著述を読んだものの誰しも感ずる特色なのである。蓮太郎は貧民、勞働者、または新平民等の生活狀態を研究して、社會の下層を流れる清水に掘りあてゐる迄は倦まず撓まず努力めるばかりでなく、また其を讀者の前に突着けて、右からも左からも説明して、吞込めないと思ふことは何度繰返しても、讀者の腹の中に置かなければ承知しないといふ遣方であつた。尤も蓮太郎のは哲學とか經濟とかの方面から左様いふ問題を取扱はないで、寧ろ心理の研究に基礎を置いた。文章はたゞ岩石を並べたやうに思想を並べたもので、露骨なところ

に反つて人を動かす力があつたのである。

しかし丑松が蓮太郎の書いたものを愛讀するのは唯其丈の理由からでは無い。新しい思想家でもあり戦士でもある猪子蓮太郎といふ人物が穢多の中から産れたといふ事實は、丑松の心に深い感動を與へたので——まあ、丑松の積りでは、隱に先輩として慕つて居るのである。同じ人間であり乍ら、自分等ばかり其様に輕蔑される道理が無い、といふ烈しい意氣込を持つやうになつたのも、實はこの先輩の感化であつた。斯ういふ譯から、蓮太郎の著述といへば必ず買つて讀む。雜誌に名が出る、必ず目を通す。讀めば讀む程丑松はこの先輩に手を引かれて、新しい世界の方へ連れて行かれるやうな氣がした。穢多としての悲しい自覺はいつの間にか其頭を擡げたのである。今度の新著述は、「我は穢多なり」といふ文句で始めてあつた。其中には同族の無智と零落とが

活きた畫のやうに描いてあつた。其中には多くの正直な男女が、たゞ穢多の生れといふばかりで、社會から捨てられて行く光景も寫してあつた。其中には又、著者の煩悶の歴史、歡し哀しい過去の追想、精神の自由を求めて、しかも其が得られないで、不調和な社會の爲に苦みぬいた懷疑の昔語から、朝空を望むやうな新しい生涯に入る迄——熱心な男性の嗚咽の聲を聞くやうに書きあらはしてあつた。

新しい生涯——それが蓮太郎には偶然な身のつまづきから開けたのである。生れは信州高遠の人。古い穢多の宗族といふことは、丁度長野の師範校に心理學の講師として來て居た頃——丑松がまだ入學しない以前——同じ南信の地方から出て來た二三の生徒の口から泄れた。講師の中に賤民の子がある。是噂が全校へ播つた時は、一同驚愕と疑心とで動揺した。ある人は蓮太郎の人物を、ある人はその容貌を、ある人はその學識を、いづれも穢多の生れとは思はれないと言つて、どうしても虚言だと言張るのであつた。放逐、放逐、聲は一部の教師仲間の嫉妬から起つた。嗚呼、人種の偏執といふことが無いものなら、「キシネフ」で殺される猶太人もなからうし、西洋で言嘯す黃禍の説もなからう。無理が通れば道理が引込むといふ斯世の中に、誰が穢多の子の放逐を不當だと言ふものがあらう。いよく蓮太郎が身の素性を自白して、多くの校友に別離を告げて行く時、この講師の爲に同情の涙を流すものは一人もなかつた。蓮太郎は師範校の門を出て、「學問の爲の學問」を捨てたのである。

この當時の光景は『懺悔錄』の中に精しく記載してあつた。丑松は身につまされるかして、幾度か読みかけた本を閉ぢて、目を瞑つて、やがて其を読むのは苦しくなつて來た。同情は妙なもの